

大熊喜邦の近業「本陣の研究」を讀む

安田正鷹

一 著者大熊喜邦氏

「東海道宿驛と其の本陣の研究附中山道宿驛と其の本陣」と云ふ著書を、昨年末に丸善書房から刊行せられた。大熊喜邦氏は、吾が建築界の權威として有名な士である。氏の設計及監督に成れる帝國議會の建物は、霞ヶ關の丘高く、永にその白堊の威容を旭日夕陽に輝かすことであらう。この建物こそは、當に氏の金字塔であるわけである。

かゝる建築界の權威が、本陣の研究と云ふやうな、どちらかと云へば方面違ひの、交通史の研究に關する著書を發表せられやうとは、何人も考へ及ばなかつたことと思ふ。本文の筆者も亦その例外ならざる一人であつた。

しかし、氏の著書を購ひ求めて、いろいろ讀み進むにつれて、氏の家系のやうなことから、氏の家に傳はるいろいろの古文書や

古具などのことを、それとなく知るに及んで、この研究も、偶然の思ひ付きから出でたるものでなく、深い根據のあるものであることを、臆氣ながら知ることが出来たやうに思はれた。

筆者の推定にして誤りなしとすれば、大熊喜邦氏の祖父に當る大熊善太郎氏は、佐渡奉行や武藏國の代官を勤むる幕臣であつたやうである。佐渡奉行から武藏國の代官に轉じたものが、その反對であつたか、そのところのことは、事情を解せぬ筆者には、何とも判斷の出来ないところであるが、現代の地方官が、いろいろの地方に轉勤させられる如く、舊幕時代に於けるお役人も、いろいろ轉勤したものだと思はれ、大熊喜邦氏の家も、さういふ家柄であつたやうである。

著書の記すところに依れば、佐渡奉行が海上を往復するには白地に黒の紋を染めぬいた麻幕をうち、大旗一旒、吹流一旒、毛槍二本及び馬印を建て、船上に威儀を整へたものであつたといふ

ことである。しかも、今なほ氏の家には、これ等の交通用具が保存せられてあるといふことであるから、こんなことから、舊幕時代に於ける交通については、著書としては興味多きものであつたと思はれるのである。

氏の祖父に當る大熊喜邦氏は、また武藏國に於いて、江戸廻り十萬石領の代官を勤め、中山道浦和宿、大宮宿、桶川宿などはその支配下にあつたから、代官として、宿驛に關するいろいろの事務も取扱つたのであり、當時の古文書などもなほ多く藏されてゐることと思はれるのである。

かくの如く、いろいろの事情から、大熊喜邦氏は幼時から、舊幕時代に於ける諸制度や、交通に關することには、興味ばかりではなく、人に多く知られない知識を持つて居られたことと思はれ、それが發展して、建築家としての氏が、本陣の建物についての、研究を進められ、それに附隨して、東海道や中山道の交通事情の研究にまでそれが發展したものと思はれる。孰れにもせよ大熊喜邦氏の「本陣の研究」は、偶然になつたものではなかつたと思はれる。

二 研究の内容

研究の内容と云ふよりも、本書の内容と云つた方が、より適切であるかも知れぬ。本書の内容は、次の如き諸章から成つてゐる。

東海道の宿驛と其の宿勢

交通機關としての本陣と其の布置

旅人休泊の脇本陣及び旅籠屋と其の布置

宿驛に於ける高級旅人の休泊

宿次機關としての陸上交通

東海道筋關所の概要

街道通行に關する取締と作法

本陣の建築

脇本陣と旅籠屋の建築

接待休泊所の存在と其の規模

街道通行の諸相

中山道宿驛と其の本陣

これ以外に、挿圖が百五十二葉ほど挿入してあり、その中には、先に述べた氏の祖父大熊善太郎氏使用の船印や宿札などの寫眞もある。挿圖の中で最も多いものは、本陣や脇本陣の間取圖であるが、またその外観を寫した寫眞や版畫なども多く挿入されて居り、本陣の玄關先の構造圖や、屋根組の構造圖、座敷内部の模様を寫した寫眞なども挿入せられてゐる。

挿圖の外に、本書の内容をなしてゐるものに、次の如き各種の調査表がある。

東海道宿驛間里程及駄賃一覽表

一二頁以下

東海道宿驛宿勢一覽表

一八頁以下

奥州道中及日光道中宿驛宿勢一覽表

二四頁以下

東海道宿驛本陣及脇本陣の規模と數

五九頁以下

岡崎宿傳馬町旅籠屋順及間口

八八頁以下

保土ヶ谷宿本陣脇本陣旅籠屋後世之者家

九三頁以下

數人數書上帳

一七九頁以下

勅使院使及參向の公卿其の他人馬使ひ高

一八一頁以下

參勤の大名の人馬使ひ高

一九〇頁以下

東海道宿々本馬駄賃覺

一九八頁以下

大井川越人足賃

三三三頁以下

中山道宿驛宿勢一覽

三三八頁以下

中山道宿驛本陣、脇本陣表

三三八頁以下

右に掲げた中山道宿驛本陣、脇本陣表の中に、馬籠宿の本陣職島崎善左衛門、本陣坪數百三十坪、尾州領と云ふ調査が載つてゐる。この馬籠の本陣職島崎善左衛門こそは、島崎藤村氏の生家で、筆者が本誌に曾て紹介したことのある、藤村の最近の大作「夜明け前」の主人公吉左衛門のことである。

三本陣

慶長六年驛傳の制が確立せられ、馬繼の遞送のために宿が置かれた(一一頁)。宿驛機構の執行組織としては、宿に名主、年寄及

び宿役人等が置かれ、宿の事務に當り、間屋、年寄、傳馬役等宿次人馬の事を司り、本陣職、年代等宿泊のことに従事し、宿驛の機能は停滯することなく、執行されてゐるのである(四〇頁)。

本陣の稱は古い。貞治二年足利義詮上洛の時、その旅舎を本陣と稱し、且つ其の宿札を掲げたとされ、軍旅の本營に稱へられたものである。爾來旅舎を本陣といふ稱が用ひられ始めた(四七頁)。本陣は勅使、院使、宮、門跡、公卿、大小名を始め、駿府、大阪、二條御番衆、所々御目付の内替り等公用の武家其の外諸侯家老職等の宿泊する特別の旅舎で、往來頻繁な所では、庶民の宿泊は出来なかつた(五四頁)

大名も定本陣を定め、漫りに宿泊所を變更せざる慣行にて、半官半民の業務なれば、定客を失ふ患なし。家屋の構造も上段通りの外は疎造にて、家具も只間に合すのみにて全備せず、公家、門跡、幕府の重役等の宿泊には領主より貸付けた。本陣に使用する召使は、下男一人手代二人、下女二三人に過ぎず、大名の宿泊にて、人員の多數なる場合には、常に出入する小旅籠屋の亭主、手代、女中を日雇として使用する。大名等の主公奥方は、近習、御側の男女あれば本陣の下女等は殆んど使用せず、食事に於ても料理方の隨從し來り、主公の食物を調理せしむ。定宿の諸大名、幕府御用旅行者の外には、収入を増加なし得ざれば、何れの本陣も餘裕なく、火災に因り燒失するも、資金乏しければ、額主の貸下金、

宿方の援助等にて再築す(五四頁)。

東海道は諸侯の交通が頻繁であつたから、休泊には前もつて準備は勿論、他番との差合を避けねばならず、相當の手配を必要とし、旅行に先立ち遅くも五日、百日前に休泊の日を豫定して置かねばならなかつた。この宿泊の豫約に關して請書を出した(一〇八頁)。勅使、宮家及御三家、國持大名及び幕府重職の宿泊には、門と玄關に其の家の定紋を黒く染めたる白麻の幕を張り、宿の兩端の入口と本陣の門前には、大名の氏名を幅一尺長四尺許りの分厚の板に筆太に書し、一丈餘の柱を附し、關札と號して建て、此の宿に止宿することを表示す。夜は提燈臺に提燈を吊して門前と門内に一對宛を置く。是にも定紋を附けた。中位の名などは、玄關に紫縮緬、門には麻幕を張つた(一二六頁)。

本陣の間取りは式臺を構へ、玄關を置き、次座敷、次之間奥書院、上段之間と座敷が連続して配列されてゐる。座敷境は殆んど建具のみをもつて仕切つてゐるが、それは建具の嵌外しに依つて間割は變更自在、上段之間と次の間との外は、思ふやうに座敷割をするがためである。本陣の家族は勝手居住の間に控へ、本屋の殆んど全部はこれを提供して用命に供へ、酒食は膳部方の從者に於て調理調進することが普通である。

従つて臺所、料理の間、調進の間が必ず座敷構の一部かまたはその近くに置かれてゐる。藩に依つては食器、風呂桶を持ち込むので

通行の諸荷物是非常な數に上つたとされてゐる(一二七頁以下)。

幕府萬石以上のものに示達し、本陣以外への休泊を禁じた。それは後世に至るに従つて諸物價も上り、節約をする結果として、場末の茶屋で小休みするもの、間の宿に宿泊するものが出来て、本陣の經營が困難したからである(一五一頁以下)。

諸家道中凡そ五千石より萬石内外、休みて百疋、二百疋、銀一枚、泊所にして二百疋、三百疋、五百疋までなり。四五萬石より十四五萬石の間は、休所にて二百疋より六百疋まで、又三枚より二枚なり。泊所にて一兩より三兩まで又二枚より五枚までなり。十五六萬石より五七十萬石の家とても、差したる別はなきものなり。これで元祿、享保頃の諸大名が、本陣に拂ふ座敷料の凡その見當はつけられるが、別に心付を出すものが稀にあつた。また諸大名から、その國々の産物、織物などを貰ひ、年始や機嫌伺の時には、それぞれ拜領物などがあり、また宿外までも懼れば、定本陣とすに諸侯は、救助の爲め泊りとして銀一枚給はる格では四五枚、四五枚給はる格では十枚、二十枚給はるので、幕府の補助金なくして速かに普請は出来上つた(一六〇頁以下)。

四 本陣の遺構

東海道を始め、中山道その他に於ける本陣の遺構は、燒失や政

築や、移築などのために、現存してゐるものは極めて僅かである。本書の示すところに依れば、東海道筋に於ては、次の如く僅かのものが遺構の一部を存してゐる。

江尻宿本陣	寺尾	六右衛門	奥座敷のみ存す
袋井宿本陣	田代八郎右衛門		奥座敷移築なし
舞坂宿本陣	宮崎	傳左衛門	奥座敷のみ存す
新居宿本陣	飯田	武兵衛	奥座敷移築他なし
二川宿本陣	馬場	彦十郎	外部のみ存す
岡崎宿本陣	服部	専左衛門	奥座敷移築
同 脇本陣	大津	勘助	大部分存す
四日市本陣	黒川	彦兵衛	一部存す
土山宿本陣	土山	平重郎	舊態存す
石部宿本陣	小島	金左衛門	外観存す
草津宿本陣	田中	七左衛門	大部分舊態存す
中山道筋に於ける本陣、脇本陣にして遺構の存するのは次の如きものである。			
浦和宿本陣	星野	權兵衛	表門のみ存す
大宮宿本陣	山崎	喜左衛門	上段之間及次之間を存す
同 脇本陣	栗原	定右衛門	外観を存す
桶川宿本陣	府川	甚右衛門	上段之間を存す
追川宿本陣	土屋	市左衛門	上段四間を存す

和田宿脇本陣 琴川 旅館 舊構を存す
 福島宿本陣 白木十郎左衛門 土藏のみ存す
 太田宿脇本陣 林 魁 一 舊構を存す

附

美濃路大垣宿本陣 飯沼武右衛門 遺構を存す

東海道筋にしても、また中山道筋にしても、本陣、脇本陣の全遺構を存するもの殆んどなく、僅かにその一部を残すものすら、餘り多きを數ふことが出来ない。これはいろいろの理由に依ることゝ思はれるが、明治になつてから七十年ほどの間に、世態の變遷が如何に激甚であつたかを語るものであらう。

筆者は昨年の十月信州追分宿の油屋に泊つたことがある。それは特に理由があつたわけではなく、油屋といふ旅館があつて、四圍の風物が面白いといふことを、文藝春秋あたりの隨筆で讀んだことを想ひ出したからである。

夜遅くになつて油屋について、無理に泊めて貰つたのであるが、朝目が覺めて外を眺め廻はすと、淺間山が眞上にあつて、その麓一帯のスロープには、まだ落葉松の黄葉や檜の黄葉が残つてゐた。宿の二階から眺めると遙か南方の枯葉の間を信越線の汽車が煙を噴いて通つてゐた。建物のあるところは、汽車の通つてゐるところよりも餘程高いところであつた。この油屋には、夏以來滞在してゐる若い男女の客が三人ほどゐた。體の具合が悪くて、藤

生に來てゐるのだといふことであつた。堀辰雄とか尾崎喜八とか田部重治と云つた人も、よく來て長く滞在するといふことであつた。皆様が長く滞在して、山を歩いたり、繪を書いたり、本を讀んだり、文章を書いたりなさいますと、主婦さんが朝の食事のときに語つたりした。

この油屋旅館は近く改築されたものだが、數年前に焼失した建物追分宿の脇本陣の遺構を傳ふるものであつた。昨夜追別驛から、この旅館まで同行して呉れた青年らしい男が、眞暗な街道を歩きながら、筆者の泊る豫定になつてゐる油屋のことを、いろいろと説明して、建物が焼失したときに、古い文書も、家具も焼いてしまつて、惜しいことを致しましたと語つた。このことを主婦さんに話すと、それは多分本陣の子息さんでせう。東京の方にお勤めに出てゐますから、歸つて來たのでせう。本陣はすぐ近くに「あります」と教へて呉れた。筆者はその頃になつても、まだ油屋が脇本陣小川助左衛門の跡だといふことを知らなかつた。歸りしなに、繪葉書を買つて、焼失したのが脇本陣であつたことを知ると急に惜しいことをしたものだと思つた。そして、教へられた通りに、本陣や追分を見てから追分驛に向つたのである。

本陣は遺構らしきものは全くなく、明治天皇御巡幸の際の御駐蹕の跡として、嚴しい標柱が建つてゐた。追分は二つに分れ、一方は中山道小田井宿、岩村田宿に續き、他方は北陸街道に通ずる

ものであり、この分岐點に石の地藏尊像や、古い碑などが残つてゐた。その附近には、往昔の街道の名残をとどむる建物が、なほも残つて居り、その中には旅館らしいのや、茶屋何々と記した古風な建物の表構へもあつた。

五 結 び

筆者は島崎藤村の「夜明け前」を生きたる中山道交通史として本誌に紹介したことがある。その際に、藤村から筆者に貰つた手紙を添へて置いた。その手紙の中で、藤村は「夜明け前」の資料を、尾州徳川家の蓬左文庫や、木曾王龍村の松原氏古帳や、妻籠本陣日記や、御年貢皆濟目録や、大黒屋日記や、その他の史料を參考にしたといふことを教へて呉れた。その中にある妻籠本陣といふのは、本書に依れば、藤村と同姓の、島崎與次右衛門が本陣職にあつたことを記してゐる。

かういふやうに、藤村と本書とを關聯せしめて讀んでみると、筆者にとりては、興味深々として盡きざるものを覺ゆるのである。それで藤村氏に對して、本書を教へて上げたら、藤村氏も或ひは興味多きものに思ふかも知れないと考へ、いろいろ教へを受けながら、その後ろくに返事も出していない筆者の無禮を、藤村氏に謝したいとも思つてゐるのである。

信州追分の油屋に泊つたときには、筆者はまだ本書を知らない

ときであつた。淺間を中心とする、あの荒寥たる風物が、殊に落葉松や檜の黄葉が、雪近くなつて僅かに残つてゐる淋しい風景が、筆者にはどういふものか、なつかしきものに思はるゝところから、追分に泊つて見たかつたのであつたが、始めて追分宿に泊つて見ると、残されたる舊街道の模様や宿驛の遺構などが、あたりの風景とはまた異りたる興味を、強く筆者をそよめることゝなつたのである。それで筆者としては、もう少し落ちついてゆつくりと、追分の油屋に泊つてみたいと思つてゐたところへ、本書を得たのであるが、本書に依つて、いろいろのことが一層明かになるにつれて、追分宿に對する興味は、一しほ増して來たのである。

筆者と本書との關係を、少しばかり書き過ぎたやうである。本稿の目的とするところは、本書の内容を紹介するにあつたから、餘りこの目的から逸脱してはならない。それに紙數もだい分長くなつたやうだから、こゝらあたりで一應擱筆することゝせねばなるまい。しかし、本稿を終るにあつたて、本書の内容や、藤村の「夜明け前」を想ひ返してゐると、海道筋にしても、本會路にしても、甲州路にしても、美濃路にしても、日光街道にしても、將また奥州路にしても、滅び行く遺構をしのぶといふことは、それらに詩情をそよめるものがある。(二二六〇三年一月五日)

若葉吟社詠草

朝詣いつもの道に巢鳥かな	静
戰地より曠れの歸郷や春の色	同
四圍の山に雪の名残や温泉町晴れ	同
祖國守る極北の野ぞ春の色	同
月落ちし森の夜空よ巢鳥啼く	落
信濃路の霞む山河や残る雪	同
我郷の雪を名残りに友征けり	同
大陸に陽炎もえて春の土	静
餌を求む親鳥待ちて雛騒ぐ	同
里すでに名残の雪のスキー宿	同
増産に黒く光りて春の土	藝
薪割るや雪の名残りの風愉し	同
次ぎ／＼と收む戦果や春の色	翠
春色や都の空のアドバルーン	野
斧入るゝ大樹仰げり巢鳥啼く	同